# 平家物語

長門本

四

リ 5
2004
4

昭和5
2004

宮内省圖書寮

# 平家物語巻四

丹波少將被流罪事
成經康頼俊寛行硫黄島事
式部大輔章綱被召返事
成親卿鹿ヶ谷事
信俊尋參事
足摺明神事
霧島嶽事
硫黄島吐金事

本邦桐材藏書之書
廣辻氏藏書記

熊野參詣事
康頼二首歌事
藤武事
成親死去事
讃岐院御事 并 佐藤兵衛入道出家事
宇治左大臣贈官事

丹波少將被流罪事

サ三日ハ福原ニ住ケル〻いきたる心地セズ妹尾太郎ハ故ノ
妻宿所ニ立寄テ我方ニ引ケレ共一人ノ小姓ヲ召具シ
尾ニ宰相ノ殿ノ知ル人ノ事ヲ思ヒ出テ
たゞ一人ノ小姓ヲ相具シ給ヒ
きうにはたきを止しられ尼ゝ世ヲ
ゑの屋のおくが事のあり〻 備中ノ國ノ
家にかくれる屋敷と云
さ伯耆國つと南北ノ

[illegible]

寺執行後覺正判官康頼いとゝ島へ流され給ふ

日羅をとりまゐらせ南海へ出給ふ少将八一所にて

少へき母は父の子人國はなれ南海へ出給ふ

度しかるに川あかくなられ給ふ今日迄流れて重をうき

事を南かぶりたるものきかぬ者のきかぬ者のきかぬ者

とり聞きふ迄ふたちしくいと歎はかりなり

成親康頼後覺行硫黄島事

六月廿五日みなもの形福原を立給三人川れを西國へ

むと云ふ康頼入道紫野と云所に老たる海

士の妻子親しく知音なりけり今一度行

こいと云ひ出し名殘をしきと思ふ

此時に推移を叶きりきりなれば少将のまゝ

ちうの行事を聞と云ふ程に日本八月

ゝ三百三ヶ國を有しを崇神天皇御宇に六拾六

ヶ國ふれのなり川くしを島をとりとる九州

九箇所伊豆八一ヶ國を有し殘伊勢伊賀淡路を

四ヶ國と名付け海八ヶ國にて有しが後世拾ヶ國
丹波を出て五ヶ國と名付く是拾ヶ國に名を付しと云へ
共いつくに境を定めし國中廣く八方へ千漢土ハ萬里の
山あり孔雀獅子住す日本ハ千里の野あり故ハ虎す
きすと云へ共孔雀成經卿一院の御供人ハ
らせりしかと大國数多有しき大庄其数加行して
巴川孔雀又ハ雀鷹ハ三十余日川いと行きつるとも
鬣の使の上り廿日ハ廿日ハ南へ
しの妹尾児島を〳〵と云共二三日ハ有るとも孔

是ハ沙弟之ゝ動しとて〳〵ハ有りと有りしハ孔雀ハ絵と
江へ書方かしく流り外れたと思ふ
武部大輔章綱ハ法師の
芸師の霊地ハ善薬しして都攻の事をかんたん仕く
たきて祈ハ程ハ百日ハ海〳〵名所ハ霊地ハ
紀の国ハ岩間を分ける山川ハ川しる谷の下ハ
欲の程ハ唯ハりかとしし七つまのかゝ下ハ浪ハ二度め
しさ孔雀事かとしして法の国ハ海の林と云所にて
出家して名を本ハ志ゝの康元ハ供したりける

かり毎年て都のへけ作りて出家元ないさ[illegible]りかれか
栄花七枝を引くへくて墨染の袖とかるる折をなくかく
ぢ思ひ引けるら
古へへ此の長を思きっへくいかれ元むる墨染の袖
終ての青紙をて名り世七神をとく捨さりすると長
と切な元之法名性蓮とかれ礼りかくく三人川礼き
国へ下向せ礼ら十とふ備中の国せの郡芝寺り
妙好姉尼を元してまり見へ伝妹尾の間まち死よ
へ知い拙かる身ら礼と之まり見へまるむといた家
切ら多元ら毎を乗り毎と大納言殿七ら迫事を
礼之作せよ毛毎へんけるの形之まりせむ又死せら
拙礼を志ら一にく後毛にそり尋きるん我いるへ
島へ下りるん屋ら後上らむ書切ら自ふまり切れいの毎やと
作毛礼行ら月ら海上三三里の左を無頼かく
へ十年作のむ祈畏そうけりひひ伝前伝
中七備国とを中れら芸妹尾児島ら乗ふ左
大のる左三十余日に来りい上下向六拾余日ら左てれへ
宣下と御帳ら内より派しかふと之ら篇之伝此堂の

妻屋をたゝくをとこ誰なるぞ問ときく程に京にて二位殿
〳〵侍也、ふとと〳〵と大政入道殿の出家の出家とて
持参る候ハ〳〵と云て立おくさ屋にて本尊ハ
いとゆゝしく出給ひ立ぬ利生也

成親卿出家之事

廿三日大納言かゝる事りやとおもへ共ゆゑ
とかりくきも（けれ）ハ形をうしなひて法名ハ行円日すく
さんも恐なく仏事を待る猶世にあるとおもひ
人のおもんもはゝ〳〵ハ出家の志あるつと内〳〵少者共

かゝ合せられたりけるとも七月ひたり
ハ大納言俊寛僧都ハ安養寺の住信調諸席と
〳〵戒師を請して出家〳〵なひけり

信俊尋参る事

大納言北方ハ北山住居かゝるの庵〳〵住ハ北山里ハ
さらぬたゝ物うこの〳〵いと志ひ之十まひ北ハ迎彩
月日〳〵この孫の〳〵日つゝ女房侍共
其数多かりしうゝ身を捨て北ハ世を恐れて
人目をひゝむ程かゝ問とあるゝ者あり者中ハ大

納言殿と云る君仕ひ奉る源左衛門尉殿と云侍りしが情ある男にて時に事に触れ
る業程に奈りたり事に北方籠れ給へをくめしてあ
ひ給ふ長や殿に伺前乃國児島と云ふ所
に行ひ給ふ通ひ給ふ有木の別所と云所に
すと侍りけるが世の中に是が人一
人のみ事ありしに生れやたらむ其所に来を志
らすいまし命さきに不幸の太乃意の事いか
計り思ひ給ふらむ信とし思ひ給ふ有
様をとてすり寄ふ所のあんや丹の一通もき
て返事を待つるに限りおれ仏のうちもは
おくさむ事やとおもひ給へいて文をとれなひん
礼に代りとおみ給おまへに識に頃君仕
はれ身にくらへ限の御供を仕る所とぞん
ひく芸能りの有様人を人と仕まつる事
に兼ひしるに力に及はんして所をまりひき
明るに言礼にも君の仕事を外の事をもあ
くに礼ひ給ひ年に侍り孫に礼奉り

あひしるしとて、ものの
ふめりて、右孔すい人うこ
乃作をうけある上に身に作ふあり、いと仕りきは
文をもて尋参れりんと申孔を以て方大ふ怪あひ
さはらんくハしく書たひさり、若君姫君も名ん
りしふ父の名とへとそ此書たひてハ此ハかし
是を給ひて偽茶現しあ尋参りて武士ん
はの次郎小今一度ゑまを室ゆやとて召の侍源たつ
尉信俊と申者はるくと尋参りんと申孔ハ武士も
物を礼をあとひりんいるくと尋参りて又を孔を

土を強小思りまそくて若しりある第の庵の中小
ものの法之と云物の上小僧の仏ふ一枚ときすを
笠内住長の志物ふ所りまる書そはまを(ふりふる
と黒土源七多のとを乃ものを孔小の用ハ孔を消
果り大納言入道殿も今更かあくみれ仏をす
ふ多くし者共の中小いふくたるを来たち殺
と七多ひりの物を入志岸ふ海と長七信と
おくくゆ事ふ小七方去六月朔ふ小山寺
院の僧房小菩提講行所ハ設所志ひさ百石

給いしかの品お前のくちびるに清らかなる事鈴かるまい
ぞんぜられ候へ〜みなみの事まで作られる次第
番〜くゆくは各元出して参り殿より大納言殿
是を受くるおもかれそれくれの詞をかりて受
るかの方若君姫君の高出〜なる有様第
文月日を十五日さき様おくれかの方様を
出仕なされ事を受て男女覚悟かりたるかもい
ちまちまおれなつる様實ふ明りおなくこと信と
二ヶ月ばかりおく〜中なるとかくこれ先をて参也

ます限り世界を様なる受て参り殿ハ為ん
つゝ都まで又法華き海ゝ方もひさりたるゝ
法華ゝのく道事を今一度ひらん世界と為ゝ先ハ礼
ひつゝふむかしく稽をついい詞りおくまるるおやれ
ほゝ参れひんすゝむ出家苦労思ひ至り参ゝ
殿今度出家事を給ひひき持ゝ参りて又出殿を
うゝ殿りひ先とゝ礼ハ大納言ふ殿りおゝ
東ふ無ハ礼おゝ論ふさるゝ〜とくゝ論上礼法ゝ
ぞんたひを法川ゝ殿きゝちゝ殿様いるゝ

死と知の八後世をたれまうさんと思ふ事あるうき
ものしるべくてのみ事あるを引ぬきみかりを見をかぐ
ものに渡せよおうくしくきこえまうむけん
世のたれおとろかくかきけるひとそ其たくた
行末の事ともあれ八墨染をかるこのもとやいとてもおくらめ
と書とあさなしそうに若君姫君に返事もかの
とし持て内上りいとゆ屋に大納言のもしてのみ
屋事と云ふ尽宮礼芸さけ〳〵さの修りかたひ
毎ゆ礼を返事たひの人ものあとに

て屋うせうる扱りかのうき事ゆ祝に信〳〵敬上り
ゆ山〳〵奉り〳〵返事をり礼八小の方礼をら
しふく礼ハやまし命ハ給まき〳〵ものやと
こ若君〳〵返事を引ひちにてみかくしの
おう〳〵ものにけるを一月ゆ方ひにる
此人に様かの礼をとこ又物のをすりか
礼ものあひめ小ものに〳〵をあ上ゆ入ものゆ祝ゆ
当ものゆこ若すれ〳〵ものの礼をひるゆ川りのいき
つきちり礼ハ思ものに面新をりあり若君姫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

誰のゆゑ[illegible]大納言のかたをゆるさるべき[illegible]

と[illegible]事[illegible]

[illegible]

[illegible]大納言はかくして[illegible]

[illegible]

## 足摺明神

丹波が原備中の國妹尾と云ふ井と云ふ所に松

が枝[illegible]波路に清うくよ是は伊豫國宇地郡つき

く[illegible]礼を言く降つたる雨を山の巻に[illegible]今礼は論礼は

川[illegible]土佐の畑足摺の[illegible]

礼は[illegible]将[illegible]出て扨[illegible]の理[illegible]信[illegible]

有漏の身をすてゝ山をおもんと誓て二十日

[illegible]

出船[illegible]

くとその汀に吹つけ聖人理（行法の理）をさとり色
とて又百日乃行法をしるひ之百日迄礼ハ聖人とが
人を乗せ八叶まして此船に乗て一人残す彼舟に乗
ほ舟也白きぬの帆をかけて順風に任せけるを
いて事を危なくもるに此事を告うるに此者ハ聖
人に拝礼をしてなほ命をさらくせんを願むと答する
を出しむ聖人をしてせ死を出すまもせんと仰や
舟に乗せ行くを程なく礼ハ名残をしく志ひ乗て
アラバ人へのまに倒臥足拝をしてあめさかり其足

摺地をうち身をかくし仏中に入るあ聖人を志ひ
し志切なりしに切なりしに魂去て既に聖人の供を
てもらくせんを願なり此所に此所に本礼
地観音に入て海まもすん志ゆく足拝の明神にて
きに長寿に成れ礼昔の礼因位の時の出事志
りに八千成経の歌を感めさ歌ハ（本地観音菩薩つ
無量寿仏大慈大悲定摺明神にて住所にうち拝
をしるかに大乗とのうち何事に為とめ物の出有
拝ハ礼と思ま者ハ者ハ者ハ日数を当稲

に伊豫と豊後との境なるちの山さかの浦とて
人丸とゝ[illegible]と[illegible]と[illegible]豊後國米水浦と[illegible]花
さとゝいひ[illegible]放人近江乃水ゝ[illegible]ま[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
おちの滝[illegible]の[illegible]の滝[illegible]ん[illegible]
[illegible]事[illegible]
[illegible]の川[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]物[illegible]
日向の國[illegible]の滝口の[illegible]

霧島嶽の事

[illegible]
さ[illegible]中尼見と我朝人王九拾神武天皇乃日向の
國宮崎の郡小帝都をたゝ御石位有し時三女一男
[illegible]十九佛を作りて供御
[illegible]家初竈門三足九峯と
[illegible]中絶[illegible]時と我の日記をもつて見るといへ
[illegible]遠流九思ひ出[illegible]谷
[illegible]
引大山といひ[illegible]月[illegible]日新のさゝ元此源山のかたら

七年かんを隔きたへて日向國西方の島津の庄小法
師給分の庄内小野さくらゝ郷といふ所に一代峯をこそおひ
へて燒後世界家有日本家初の峯也ゝ
号代金峯山寺毋のたけ嶽富士代高根ゝ家初の峯
なる故に名付てきいしたの峯といふ六所權現の靈地
なかれ頃小元別有長時猛火ゝ一あのりて雲たつ
くゝ川とおく黒砂を降りくゝ其の千里ともゝる事
なゝ無礼共彼峯を行の本地共を問ゝるをけ
り広の図書寫山代はかんこゝして考る證拠上人彼峯

に登山して我が神の本地を拝ゝかんと誓願
いくゝ七日斎籠して法華經をとくゝ七日せゝ礼ゝる
普賢ゝ代別体ゝ大山震動して岩崩れの
ゝ火ゝへ来たる烟ゝ川まいくゝ来たりくてまゝり三丈
共たけ拾丈計りの大蛇の角ゝ加礼木のあとゝお
ほひかゝり眼八月代出とくゝ大小いろ種ゝ
ゝ出来ゝ上人見て恐怖して木の山の有様をみる
本より龍宮城とゝ八ゝ乙ゝ弟ゝ礼にあるゝ小無跡ゝ
龍代次のゝて御ゝこの本地を拝ゝすくゝ

本地をたづぬるに、はるかに現世安穏の霊地なり。
ゆゑにこれをまもりたまふ大蛇かんちふ海底川尻のほのぬま
刹那三尺ばかりなる大鷹の尾房の鈴をつりかけ
して猛火の中より飛出て前なる平岩にいりて性
空をとりて爪を龍をなぶり周章くまなく況屋敷
色の海をかけ周章くまなく見やぶるとて眼をかがやかして
仏神を敬ふ者をとがめ思ふ不足仏せられんと
双眼をいかむ中くもとてさつまをいさりまなこを
鷹に去るとおもふくそうして十一面観音光明かがやくし

て幼少なりしとき二度まで其時上人ながらいまだ
ねすに花中をうりおくりて涙をおさへられる性空上人
人中のせいをしらぬ人なりと仏神を拝ませ給ふ法華
乃行者と成るかの教に従ひ究竟をう他度先と拝ま
るに堪ぬ心願成就せ上人法華をあとに信仰なり
此経の中より光指さ赤のとなりん所を我生所とさた
先人と拝ませ給ひけ不理の中より光をはなってはすま
乃国書写にてまるに彼所をかんがへ長き楊し
ものをあんけの人の慮を施ゝ久る峯ありしい成

經の奉行にして相模守時宗（北条時
宗）二度古今に稀なる事なりし社參して後の世を
なすかなまと思ひて及ぶ所の武士情有者少く
仏の苦敷はんとて偽りもり奉りたりしに地形す
くれて昆仏世界なりしかば感涙をながし給ひ
名所をしるして七日奉行して法華廿八品の石に
面小書寫して山巻とはをいく世をかを別乙
梵漢両字を書おきて忘れ形見に梅桜を自
植置けるが彼山かわらみを移しかくして此寺まで

向ひかわ月日は比叡山にたゝ故さとの乙寺し
くて言ふの及ぶ礼に今桜をうゑひらゝ詠して
はをすゝ涙をおさへ此川しおく世に礼たる乙
桜也古詠おの乙なる袖を志ほり乙の武士云
ゆかりに居る礼奉せ名所おし寄せと思
ひかさる書をおし此礼とて都に見の礼に思ひ
しくはつる寫へてしまらをこと又出たゝせやめ給
を乙尾乙川き所と思ひ拾いた侍き所のゆんす
ゑし先走る礼こゝおゝ乙危はやい文新と

かゝる土佐と云所をとをり過れバ大隅の国なり此の
妻は清き渚也わたのとりを二たまひて
秋ちの紀念の此妻はおく蟬の浜の奥也下草深らん
とい名所ハ是也る世とおほしける正八幡の宮也けり
を余所ながら拝まり宿願をたてゝ通られけり此御
と都にてきゝ及ひしにまさる事と思ひ給ふ
に九州も内にハあり法の誠は世の中の流罪なれは出
かへしきして此しまの有様を御覧して八重のなへにたゝかれ
ばかりに拝まんなれは旅の空にて衣をのよ

ほし光を推ても世にもれぬ衣也先達に眼先ぞ立
しもせく所を拝みこのあし二十四里にも海をしほをこす也
早く坂らん事かなし或ハ海辺にいとくの遥なる汀にそ蒼
波をわたりして出んえんしたる或ハくくてはよ
うきくの舟き所にかゝりんいくとして泣は我らくたり
けらぬ身に旅の記旅なかなし都に更る夜の月も朗
かなるに夕にけるなるのたに前川れも花子路月に行薬谷
も思ひ出られさのあし かつらと云事なし けはいまのし
とは鬼界也都にいつ十二の島なれとくちのの島ハ日本に走りしの

ばとおもひ七日を経ていまは我朝に志さんとて白
石の浦くき石島いとう島の沖なる波中にて
とゝ乗ぶねなりしきのいしゐと云りくちゝ石の内
かゝるを三代目の小いそう島に捨おく扨頼朝に
くしき西俊寛を白石島にて捨置りかの西
つゝを白鷺多くして石白くあの流に沿て波志
浦くにて見へくいさ知よりかりゝ礼を白石島といひ
なるおやせあさを一しるしなりけ捨られ給ふ故をもも
是を思きかけるゝ物なれは島に捨置礼ハかゝるとも
云も是迄のくるはるゝ川を見て島にて一島に物をんた
けりかゝるしのるへしまして哀れ思いるはして一日に
時の日をおくるへ所をちきりとなくして俊寛り扨
頼かゝれもまくるいとう島へたとりけきて来た
無涙をなおくるる彼島西國十里に島也其島乾
地にて山田うり稲の業なおゝ礼を米穀なおしなの
幸をとりかけ礼を結布の彩り帝也島の中に高山
是峯にて火り(焚)雨降雷なる事ひまおゝ
ゝ礼を魂をゝ外の事おゝ色いとた法をたる

ちいへのかんしゃとはりたるたつのをくがはる
くと波浪をアさいりそ彼方おれを　おこ彼けそ八人の
道を事かゝ　木のはのゝ物のゝ世代人たそ似た
矣星くして生のおとゝ身にはそなくそ多り名ゝの
教おれを知る物かゝ男と女ゝ死者と木代
皮をもて為ゝさたそ袴かつゝとゝ物をゝ女ハ
木の皮をおゝに巻たる花芸男女の形をみへ百十髪を
結うさ身おひのゝ　ゝん又ゝおとゝかゝ事し
死ゝ者ゝ彼備ゝ思ゝ事ゝ　ゝ事ゝ　ゝ

十命いくゝき祝おゝ　ゝ

硫黄島地獄

かゝるを進ゝ首を切ゝ　ゝ　ゝ　ゝ地獄
ゝ歳ゝ仕ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ改ゝ乃ゝ山ゝ父母妻子ゝ此有様をゝ
ゝ八ゝ山ゝ乳ゝ人ゝ　ゝ
家の事ゝ恐ゝ　ゝ彼海ゝ　ゝ
ゝ雲の沼煙ゝ沼ゝ　ゝ蓬莱方丈ゝ例
乃三の神山ゝ島ゝ不死ゝ　ゝ

りし物なり　此つまのいたく思ひなげきいとゝ
島の住事のおくゆかしさ　なをきき長也　眼小さへ　花ら物とて
と山の家ゆゑ　此のゝ婦耳小　ゆゑら物とて　八百子の
雷のもとひたらむ事　大事と　出ぬ　くゝ
知く小川事　て　呼身元より　ゆゑら物　別去
入長と　此　ゆゑんとゆゑら　せめ　その也
此の　ゆゑり小浦　島　を　過　と　都の　を　訪め
ゆゑ　俗　紙　作り　空　ゆゑ　世　岩の　は　母小
所いたり　おくさ　事　事　と　ゆゑ　一　所小　美ゆゑ

尽せ如　ゆゑ　物　此　年　と　此　と　一　男　此　ら　も
世　身　ゆゑ　此　と　木の　葉　を　加　集　め　く　川　を
ひ　ゆゑ　こ　の　ゆゑ　と　ゆゑ　ら　唐　を　結　ら　明　一　首　ら　告
此　孔　共　め　ゆゑ　此　ら　と　平　宰　相　此　頃　肥　前　國　ゆゑ　乃
庄　と　ゆゑ　所　ゆゑ　形　ゆゑ　ゆゑ　小　き　ら　思　く　ふ　ゆゑ　ひ　ら　ふ　ら　ゆゑ
大　政　入　道　と　知　ら　ね　ゆゑ　ん　氣　を　お　ま　孔　と　お　ら　ゆゑ　程　お　ま
ゆゑ　孔　共　如　形　長　食　を　送　ら　孔　ら　孔　と　家　頼　ら　俊　寛　ら
ま　し　ゆゑ　小　の　ら　と　ら　を　送　ら　孔　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら
ゆゑ　身　小　惜　し　ら　ま　き　ゆゑ　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら

まり菊をひろひなんとて山路に方と時の御形を法
をんとそ八提に川に立て御かりさせ給ひ道引けり
めとすいてを御ふれを学さんと到底入道中なるたき
ものをけきてをいて せん元とけの仏の石をとおへて寄て
平家元の寺を作て二度都に御帰事を聚ひ後
生ほたいをり祈り先とかの孔雀明王の礼を祈を
うとひ前をまひて島の明神に参しまる島の者
共時に出て是を又と無たへさおりの御笠の御
家頼ロ上をへく都の立しにりおくにロ中まる女
七七有余おるの紫野に御りしを思ひ出りをいと
世元のいおく我に御礼しに時まかりと走を後ほ
うり者礼とり御八老の法に欲出しまへ事を
ふ法しまに思ひおうう告さをしうを今一度ゆり
又出りに此有様を作へ学て今陸をおうへ高ゆ
を又かしめとおしこの法事を近川くとおひ
川に付られたおくをり所の事をおうる家
島宗川紀を世ロ中なるに御の家を我ゆける
変化出地に前は海に出を抱ひるを海上を入法し

それを合(つかよ)て作りたる大舟一艘出来るを生人ふなを
ゝんと能をすへたり屋うるうを幔の幕を引たり
風のたのと吹たるはへるか乙入ゑれい十七八ばかの女房
遥ふ琴をひんゝひをひき今様をうゝひらう
えいゝ管弦すきたり都をたれそ後ゆゝし是
程ゆゝを尽しゆひたる事ゆゝおけれとゆゝ
まひけいる光俊五六人並居ゆゝ人を沈れ法
華経ゆゝ玉泉ゆゝ聚国説諸有ゆゝ仏行ゆゝ免ゆ
して隨喜ゆゝ涙ゆゝ舟の帆うゝ一乗ゆゝ法蓮華経の
文字ゆゝ〻ゆゝ彩れゆゝ紗ゆゝいたるをこのけゝ順風花
せ来の浦を色色うとみたりゆゝおたれとゆゝ此
極楽浄土の仏拝ゆゝ舟とゆゝ是ゆゝ是ゆゝんとおもゆゝ行
我子ゆゝ安元ゆゝ白き馬ゆゝ乗ゆゝ北島ゆゝゆゝうとみへた
りゆゝ宗頼入道夢ゆゝのゆゝゆゝ夢とゆゝ
ゆゝゆゝ人ゆゝ志ゆゝくゆゝきとゆゝうとゆゝゆゝはやくゆゝさ
めゆゝる事ゆゝ世ゆゝゆゝんゆゝゆゝと恨ゆゝ誠ゆゝ夢ゆゝ
宗頼入道ゆゝ子息宗元ゆゝ毎日都清ゆゝ参詣して
法華経ゆゝ二の巻の信解品讀ゆゝ南無

千千千万大慈大悲観世音菩薩願くハ此の願
ハ功力によて乃體姿を今一度見せ給へと祈
せ〳〵て申す誠に観音乃御利生有と頼朝
を守護給ふ事と生涯忘れ難し

熊野参詣ハ事

天性頼朝熊野信心ハ者に有り礼を或
時ハ将に申ある此島に熊野権現をいたし
り参りて帰路に祈願せいを申上て度と思ひ
いてとやり礼をハ将我〳〵世の君ハ供て
参りてハき又私ハ参詣して成経都ハ時
猶参詣を志深くいたしを一つ〳〵ハ申ス礼
に本意を遂げ給へ〳〵かれと祈りハ事後世
ハ生ある〳〵ハ極楽成出と光へ〳〵と有り礼を頼
頼入乃中ハ乃を権現遠の〳〵ハ願ひを其ハ
なりまハ仏祀近ハに有き参いナ礼ハ乃物ハ入
給ふといへり志のハ礼を當山権現と中を本地
ハ乃ハ如来ハ〳〵きまハ中すいるハ〳〵野の赤山
ハ禁也共、兎生真實をいとハいとをハん

とちこのひ行く此島ありしより我いつまを弘いを
〜ちく宗兎の中ゝ受ふかとこの上を光を内し
給ふらんいさちかめ〳〵嶋を見さりこみい
ゝ〳〵くまの山ふ似させめたる氣ハ権現を崇
光ちく帰所所ハ中ゝ中孔を少将
ハ孔を感〳〵恍ひ給ひ法勝寺の執行
ハ孔ハ孔の孔を出志ち顔を内る事を
ひへを若都上言この内孔くハ孔時山僧孔
ひらいの世〳〵やら本社へ多ゝ奉詣せす法

正寺ハ執行ハ孔ハ島へ流内せ孔内り
のかゝ〳〵内の修りふ〳〳ちきを修〳〳ハ岩ハ
角を熊野権現と崇ゝ松の木ゝきなり孔
ゝ孔ハ孔ん事の内ゝ〳〳ハ奉ん事
山王の御事ゝ〳〳する有なんとて奉詣に
ゝ内ハ内りゝ二人の人ゝ島を迫ゝ〳〳
ふ内ゝふけへゝ人跡なへゝ島の吉なり
奉ゝ孔ゝ孔ゝ島ゝ〳〳河ふ内ひふり高く
世ひへゝゝ峯乃雲取志古峯と名付けとは

るに峯に登りて南の方を望に雲海ち
んぬとして蒼天霞をなめ尾さかん添とし
て多くの瀧を渡せる白浪峯が瀧の音り
涼しく吹風に神ゆひ給ひの氣及瀧山
ひとつ寺ぬんめ寺那智の七御山と仰
なりて礼を則那智山と号に来を遂て加へり
礼を砂金として銀河へうかうなり月を
如代新をうかう元和十五年に秋長安信家の女の
船中にて ひとを弾きしらを白樂天鶴毛に
駒をとめ詠ん潯陽に江畏遷り加く屋とも
ひかをらく新宮に乙ちもとなりかすは礼
なる素のり大なる岩屋にて礼に杉一村生なり
見を本宮となりけるく草打拂ある引廻し
なり傍に石面高く聳ひへ白雲勝に聳ひきかる
ひたる素有神をそなへしる浪間左京
世民三く汀の志に別り入ちのひ千鳥鳴素を
に玉津島に明神をの吹上かと三に山ひのしる
ひく道にの岩を切放代志のを米持ん

童子五たひ王子と名付けて四方の末は下りと
一万十万せんし聖児子宮岩代をこえ物ひとく
山かと王子くと万里くの名をつくる其数を
統の木下向して法勝寺は桃紛谷祭り
あへや眺定本社におしらせ給はんとのありしれ
しと信都難治なりけれしと二人の人々たちかよ
へき浄衣なりけれしと麻の衣を纏ひつゝ沢邑
此水をさりにけり七日精進してすゝかくなり
此の国々はゞの王子が始まりける時まして

道は礼いきおこなすおもしろかしと如形かなで
北道りたる康頼法師も色が能なれはきぬくに
哀なる事共の数々あまく奔すなるして
通りなり是併我に丹誠をいたし志のふかき
を権現納受して此杉使を立のつかしは信
心を増の上をいのての宿願成就せさせへき
なのりしく北見ゆる夕には濱北をいはる
あとに千里は濱思出尽れゝ山川谷川をわたる
ありて悪業炒脳せしは罪業なる物をも折を

〳〵と祈り思ひる如此〳〵て七十余所の王子〳〵
詣させ給ふ本宮に参り〳〵てんせ申へきまして
おんの地獄の苦しみ如来の御誓十悪五逆を
捨て八識の誓願なるかゝる衆生をきらはせ
給まし〳〵石の御あるを以て金剛童子
の御をしへ拝受すべきとおのゝい
て南無日本中一大霊験の神や三所権現和光慈悲
を施光して成經性照今一度都へ召返せ
給へんと肝膽を砕きて祈り申し礼拝奉

頼りまんの次小祝を召使ひ中上る性照
市幣紙に花房を巻けり
謹上再拝維當歳次治承二年戊戌月並十
有二月日數三百五十四日八月廿八日日神己
未擇吉日良辰掛畏奉日本第一大霊
験熊野三山権現并飛瀧大薩埵教令宇
津弘前信心大施主羽林藤原成經沙弥性
照一心清浄誠抽三業相應主謹以敬白
夫證誠大權現済度苦海教主三身丹

滿覺王也西所權現或東方淨瑠璃医王
主衆病悉除如來也或南方補陀落能
化主八重玄門大士若王子娑婆世界本
主施奥衆者大士項上佛面現衆生所願
滿給至然法性真如都山自和光同塵道
入給以來神通自在雖化衆生綉善功方便
利益施給因茲自上一人迄下万民朝結无水
肩懸煩惱垢濯暮向深山宝号唱感應
無瞬時峨峨峯高无崖嶮谷深弘增除准雲

今昇露凌下爰利益地不憑牟步運嶮崖
道權現德不施何必幽遠塚御座仍證誠大
權現飛龍大薩埵青蓮茲悲眺相並早鹿八
御耳振之我等無二丹誠知見一懇志令納
受給成網性照遠流若山无早蕉城故郷
令付當人間有為妄執改速法性世為證
真理而已然則結早玉西處權現谷機隨
有縁衆生引導無縁群類為救七宝莊
嚴樓塔八万四千和光六道三有塵同給故定

業然能博水長壽得長壽礼拜連袖無際
湯〻深海罪障坊重〻峩〻高峯職悔風扇
戒律業急心誦忍辱衣重覚道花棒
神殿床動信心水澄利生池湛神明納受
給所願何不成就仰願十二衆權現利生
翹並遥翔苦海底慰左遷愁速今遂帰
洛本懐給敬白再拜
と祈申る康頼入子息左衛門尉康基の志の〻者ゆ
名を夢相の事かと思出〻〻大江の匡房卿〻〻
七箇年をすおくひて生死共名残定り〻老か
いの礼の時を大江へ〻月ゆ出るつるはさ聖かれ
そ〻いりかりの咸屋〻宮殿ありと雲とあら
いつまへらさむ思へ共夢共とも〻本宮を出けち
をまし〻ら手形をして形文〻法と〻雲とり志この峯と
ゆけ〻〻き山と文をかく〻〻法つ〻三山の奉幣とけれ礼
ゆ恨の原かりそ初のの王子共の社の
杉の生木ゆとりかき紙三合ハ〻ゆ〻ふつきゆとかりして
楚下向しる

## 康頼二首歌之事

かく諸事ふるまひの八月のなかばいらんもてる程に四月九月
上旬ゝ成ぬれば或は本宮に詣でゝはぎつゝ
とまりすゝ有れば川より信心膳に免いー
又ゝ汗出て身の毛よりもいとゝ合掌童子
北に向りたちまちに消る地して嵐吹
ろーとぞ木葉うちりぬるかきの葉の二ツ康頼の
ひらにおかるを見れば一首ひらなり一ゝ二文字
をゝひらなりゝ人よくゝ見れば一首出来ひたるを

出ーたり
ゝ早振神のいかりを祈ゝ都ゝ海ゝ屋き
康頼入道是を見て現ゝ（此島にゝ有ゝ見ゝ公ゝ此葉ゝ
出来りゝ）ゝ竹ゝ神ゝ社ゝ
今ゝ権現の四利生ゝ祈りゝ都（海ゝ屋事ゝ定也）ゝ
祈念せゝ礼ゝ康頼入道中ゝ入道ゝ家ゝ
の多ゝ中ゝ明ゝ前ゝ火ゝ灯ゝ仏ゝ供ゝ今ゝ
海ゝ屋ゝ四ゝ利生ゝ権現ゝ四ゝ利生ゝ
ゝ都ゝ屋ゝ入ゝ入ゝ

屋と思ひ[illegible]抜き[illegible]坊二と与乗そひい
[illegible]屋しくしくいう[illegible]ゆりと海人ひんする
とおぼしくしておかみをおうしてかの世祝ひり
宗頼を海へけるに草堂のまへをたりて浦島
人集りたりと見念佛をすめて同志ひ[illegible]念仏を
拍子して乱拍子を舞たり坊さの三等九ツ見
事を尽て祝儀の面白さ出乱をはかす迎ひ彼おか
らに念仏をすすめる彼草堂島人より合所を今
[illegible]ゆりとや又おりつるまはゆふよりたらまをひ弥い集く

千本に参とは我刻く一面にて坊の字を書捨の下に年
号月日を書たり一面にて二首の歌をかく
[illegible]川海の沖の小島に我有親に告よ八重汐越
思ひ乱れ恋ふ[illegible]思ふ旅寝たる[illegible]籾殻を焼
[illegible]乃二首に歌[illegible]に平利宗頼法師と能名を書
[illegible]歌坊世人見を出して宗頼を故に送
[illegible]と参卒都婆を書たりて書終て天に祈く
誓いるを願へ上げん天多い釋四天王尉羅王多ん
ら地神おして日本中一大霊験熊野権誠一乗西

所權現一方十方金剛童子日吉山王嚴島大明神の
礼とおぼしめしく我書付るこの巻必日本に
地へ引渡給へと祈給へ西風の吹度ごとに
此卒都婆を八重の志ちに結ひ入る地の祈給へ
ありてくあり思ひ定風と成り海に流れる波の上
お礼を同しおろ礼の内きわ礼と宿ひ礼風宿そ
を礼之仕るくの日数を経て卒都婆一本を然弥
新宮に潮へ寄り名浦に着共取て然程の苦
を持て行礼と祈る人りおくて定みか

ゝ又卒都婆一本を安藝に國嚴島の大明神の
御前に建て寄り名浦に着の事を康頼ひろ
ゆる僧の康頼西海の波に流れ祈へ礼ハ彼
の世に伝ふ伝のとおく都を安くか礼出て西國の方へ
修行する程に使風に彼島へ渡り生死を
り聞を事と思ひ礼とも有まじ氣に成て船り適て度
おくおぼ法ふ島人かとの渡りは京順風を待
て出て礼と中の礼ハ中を尋て渡り礼出て
世を去ゆ礼いくて此の志川礼を知はや礼

志たりおほつかなし、いうとすくきかたて思ふ安藝の
國まてゆりにゆりひんぬきりゆれを嚴の社（ほこら）
ゆゑにゆゑ明神のかたち玄武なる拝見十ゆふ後ゆゑに
山高くはひへゝ等ゆゑ矣らかゝの近門ハ十七日の秋
七月ゆかゝとを内せりけりの夢ゆゑ手三矣ゆ春
花をゆすとゆゑ誠ゆ大日如來地をはんしみつの
浦と相應せり潮来ゆ海とゆ潮去ゆハ島とあり
ゆゑ和光同塵の利生ゆゑ（いへとゆ）いろゆゆ名
いゑゆゑ此神ゆゑ海畔のゆゑ千ゆ孫を活ん

あゆゑ此ゆゑ礼ゆ常社大明神ハ三十三代大願者ゆ一の
願ゆを道ゆゆ者を守らんとの誓ゆゆハ一たび帰信
ゆゑ後生ゆ多いのゆゑ有一切衆生の願を悉叶へ
ゆとの誓有我定願ハ全見康頼入ゆハ元しゆり
ゆゆ其命を安ゆ（若いきゆゆ其おとゆ礼を
ゆハゆゆと祈誓ゆゆ誠ゆ此神失政入ゆ法ゆゆ
ゆゆ（ゆゆ）ゆゆ礼ゆ平家ゆ憤ゆゆ人をこのゆゆ
へゆ神ゆいゆ思ゆゆ華とゆ拝ゆゆ方ゆへ
ゆ程ゆ礼ゆひゆゆ

方に成て帰り月出汐満ぬるを待たうとおもひ
くすの流れる中に小さなはの枯るるのを見れば
ゆるのみるべしとおもひつゝ元を立れるかの二首しるした
書たりける是を見て長ある事知れぬれしすい
知のおもひをあらしはたして都へかへりて
上へ康頼が母に宿所繁昌に取せたり孔は毎
妻子集りて各是を見かゝるに涙をおさへかねる
新宮に漆ぬりたりける所を見て熊野へ来り
山伏になりて同じ日都へ帰きたりける義に可為
とて一丈二丈の木あるを島にすんでしかる
海に入る事を言葉百保いたんでいる孔は
この安嘉門院国にさるべくなるべくなやまして清水に祈られた
るなりの中に雑しらせて千本にて作るなる
とはなれば三尺ばかりの文字は書りいま
知さみ川市なる孔を波の内に孔すてあさ
くとしてかの島の都にて作りなる雑の孔
なれ作りあり事をうく程おくかゝいなる先へ
たゝ康頼三の命清盛にて都へ文を作へたり

とて此二首を歌を都へ奉るに礼かの卒都婆の
事えいかんおもしろく屋しいえ思ひ合せ誠に原
頼法師の跡をのこしとゞめるおゝ家の命消
屋くいけしかの島に有名の事の世をんちよとて
法皇龍顔をあらためおもしろき歌をえらび
世をゝ大江ゆきいえ出家の後大唐の國にて佛生國
の育大王の作王ゝ八万四千基の石塔内日本江ゝ
石塔に一基留事をかの老人ゝ國ゝ志ゝ書所
ハしたる事なり唐の國埴信寺に流者なんため

しるしの有るとせハなを物を屋とかを礼
出ハ乃事小奏内府記ゝ島事ひとかゝ家長ある
事なれハ○原頼いとゝの島ゝて代を跡都に
住ゝ長ゝ事ハとゝ世間をひろゝ
世ゝ二ひんぶとゝ入唐ハ小ゝ礼ハ入唐者
ゝゝゝ代本の人麿ハ島かゝれいく船おゝ山
遍ゝ赤人ハあゝ色の島川をおゝ住吉の大明神
とかゝ哲記のあのいをおゝ三輪の明神ハ杉ゝ
門をゝ代ゝのゝ三輪一字を始ひゝより

此うし諸明神たちの字の内に而千家せおりひをのへ
あいいまや大政入臣つ木石に埋り孫にいうく
この此歌を吟をれとおりひ給ハせる處也

## 蘇武事

世うしかる國よかんの武帝と申みかとましくける
王照君といへる君をゑびすの夷ばかりおる事を
くやしとおぼしめしてかの后をとりかへさんと
為に李陵といふ者を大将軍と志く十一万騎をそへ
川しおこしくへ流の王す李陵ひつとよく戦けるして

責戦はれぬ故國の軍おほくしにし官兵みな亡びぬ
歎の為に李陵をとらハれぬ故國の王に降のいる武帝
是をきゝて李陵か昔旅を頼おもひいれぬかはらす大
将軍に云へひけしけるいまは二心有る物なりと
て李陵の母をとらへて責おろしいふ父うけはゝのこを仕まつく
其かくの旅をうけいれはこれはみなかくす李陵親類兄弟
みなかうて罪せらる李陵是をつたへ聞てかなしみ
なくなくいみて曰我おもひけり胡國追討の使に撰れしと
ひそかに彼國をほろほして君の為に志をとけんと思ひしのに

より宗室なく後胡國七なのとられそれをいかなる
といへる際をうらひそ胡國を亡し〜て日氏のこゝろ
を敷せんと考て思ひつもりて今かゝるあり物いひ
上にと胡國を形そ〜て月を送りけるに武帝我
ゆ元心ゝ物をゆゆをゆゆして李陵をようひ物しけれ
ば弟子なきて漢七軍負ける事を帝安からぬ
事ふかのひのひそ天漢元年小李將軍と云兵
又蘇子前と兵とし〜拾六万騎を右大將と
なし〜て大將軍として又十二万騎の智をもりそ胡

國を責ひいけされ蘇子前を蘇武と云ふ人
を〜して軍の旗を給とて武帝仰られけるは此旗
をもて沙ゝのちとそのに持へし〜若此老命を我
方へ〜〜と宣命をうけられけり扨蘇
武明國に行そ責たゝひけれ蘇武情なたけれ
大將を初として世話の者三百人いけとられそ
塚のうちふかそ三〇と京取出そ〜ひけるか
かゝのをゆそ物も田ふるうちおく或日一日二日元
の有或ハ六日二日ふ死なりけり蘇武一人生殺り

く月を待たに故さとし恋しく紀事旦暮至んし
后るゝ時りかゝしたゝおしきかし限かゝ早乗引
学んかの花しくのかゝの宿りもあかれいけて暫
も田中さをひかゝ春を田を作り秋を
作をひかし半の乳かとしてやもの
雲紅なるかりれ乳を倉戦鳥類とみをとかゝ
秋の田の面の戸と他国へ飛行ん春を神酒かゝ
かしかゝ我あの国へもや行らんとかつゝく
かゝしかゝる朝夕ゝかれやまを戸一ツあたちうれ

なりかゝる武右のかしを云かゝく其血をうて
柘の葉に一筆書をさて庭の山ちかゝ読けく
かとしいてうり武帝上林苑と云宴に白鳥行かく
千草の色を染して白鳥有る所に戸一行飛来
そもうかゝの其神をの開いると見系一九戸
程かく飛かるかの是しを忘れんを一つ詩に翔ふ
結付しる文をしひほとかく高したりうを宮
人見を見く漢国に安る帝をつゝ忘いらんかる
其帖に云去昔被蒐宮巌崛洞徒送三春の然歌

今被放秋山田畝空同胡秋之族矢一足設此身留秦
胡國魂還ら再仕漢君と共に書たりける是を以て
帝かゝるをいとくしてて蘇武いまだ生き有るを北を
とて永律といふ賢者を大將軍として百万騎の勇
士を率して又胡國を責ふ蘇武に軍責ふ
ゆり蘇武元足に紀ら礼を尊ぶ礼共十九年の星霜を経
て王照君を送り返して都に帰る小李陵君の為
に二心なく能く胡國に居りの大將軍に為りて礼
奈ら勝し事論に面目其一世為礼共我宿軍を
ぬる事ゆ发軍敗れて我胡國にとられ降さ礼ぬり
いまりて故國を亡しと帝の仇為に忠をいたんと
ぬる知れ礼今母を殺され妻子父の石を堀た
かしてうちたるの亡魂いまだ思ひ見と出しくてせん
ものかと又ひまを見て老人すれかまを
が罪せずして事川の原に出て文を一巻書て老
武につと伝ふ武帝にたる帝見てみ子真狀に曰
雙鳧俱飛一鳧獨南翔余自留新館多今胡故人
故人去乃見帝大小の礼を合て後悔し給礼共ひか

蘇武漢庭に帰りて賜りし旗を懐に取出しそなする
扨方は軍庭に入れる胡王はこれに礼はせんかとて
なれども月山にうつる事李陵迎しも歌し
事委しくかきりなれども武帝怨恨せきあへず
す蘇武生年拾六歳にて胡国に取まく久没したり
しかば三十五にて洛都に帰りたりしかば髪は老
翁の如成りける後に傳息国と云者を送る君は
なり孝宣皇帝の代神爵二年に八拾余にて死り
其後其子孫三年喪を執り剃髪を画し

給ふ蘇武其中に有とかや是かくして子を一書と
云房札共名川帝なり彼を房の彼をいへるとこの
彼胡国を心ふるの為彼を房の翅是はとは面
彼一筆是に二首は歌の礼雲跡を重しに見ぬ沿の
うへを偽り礼は十九を送り世のくれ三年の夢
内めるり者とこの事共かの上古未代昔今世ハ
かりすかいを庵なられ共思ひとりて書かれを
る宗頼の嫡子平左門尉宗光は乃国ふまの林迫
父宗頼の供して二送りなりる一の宗頼出家志あり

はれは康元かくの如き林より都へ坂上を登りて粉
進潔斎して百日清浄寺へ参詣十法華経に
廿八品の其中に信解品をおくり誦し百日に間隔
夜に入る祈り願りの風夜する時の願には大慈大
悲千手眼拾多の木卒の花咲實なるべしと清
誓有紀市まして此体なるべしと二度父に告げ
給へと三千三百三十三度に拾を参らせ給へ
るやいなやこの島なる判官入道に夢想げに康元の白
馬に乗りて来りと云へば観音に成んは白馬に
現じ給ふなりと加様にとて是康元の妃懐胎の
人意して観音の御利生にて都へ坂上りに成ると後
に父子共に流し給ふ時康頼入道は本
宮に参り各祭を奏ぜんとて御神に拍子を合せ
ける舞を面白く舞ひ給へり御神を乞うち奉
取出して其秋手に祝典を吹れり其夜に本
宮に通夜して夜深更に及ぶ御神夢想の
梁ありしなく御神のこゑを云々と天うき雲り
俄に時雨うちして沖に方に大船一艘出来りけり

次第ハ法華経隨喜品ニ説ルガ如ク船ノ中ニ
ヒトリノ僧アリテ法華経ノ五十餘部ヲ讀
誦スル度ニ久敷ノ内ニ八人出来
タリ故ニ婦ヲ離別シ有ヘキ事ニ非ス
其頃印旛ノ郡ニ龍王
ノ八天童子ト云フ秋ニ成テ
ヲ帰ル思ヒ夢ニ云ク
ト事ヲ聞ケリ依テ權現ヲ信仰シ
ル

## 成親死去ノ事

新大納言成親卿ハ若クヨリ志タシカニ昇進ノ
家ニ生マレ合セシ大納言ヨリ第ニ先祖ニ
礼給ヘリ然ルニ人ノ讒言ニ世ノ榮華ヲ
ムクヒ紀目ヲ再故ニ帰ノ紀ヲ
失ヒ鬼ヒ島ヘ流シ礼ノ才芸ノ
幼ナカリシ頃ハ
ヲ思ノ後ニ

起臥のたゞ一の事は足ぬ川をてすがれかりし人に迄
思しく今一度ふるさと事りなくて露の命消えてんする
を悲しく思されしかくはかなきの御名残惜しく覚え御歎に付
ても何と枕にかゝりて涙にむせぶ人一人もなし前よりの中に書と
きしや何の哀れなき身成大納言殿をば小松内府にはかくして
入道相国のいかりとかく失ひするへきよし但書を乗り
ければ或時つれづれと大納言の小港に流けたり
ある智明法師大納言入道との中なりし海中風傾に
ありし間何事に付ても便りなく此所に卿まで尋来りしを

ある所は紀伊の中山備後川などゝ名のある所に有木
の別所とていふなる山寺のありけるを水木なとつく
りて難所にてそこへ移されけり小渡をせまりけるひとへにさし参りて
せばらんと申されば大納言実にもと思しそうかくり
けり遣に兜とかやひたれ彼山寺にかくれの
太郎手負の作置たりける備前をかけしたり
ありけるとかくいたされたりし七月十九日坊
此後に穴を掘るくぼき穴の底にひしを植ゑこの
落して其上に寺をたてかけたる

拾二ヶ所へ之置たりける を大納言入道殿へ
ぞんじて其上を少なりて義入ひろを用ゐ君
たる事ゆゑ上ゆをもつけさうい乙てり
此事かくし給ふ世間小拙ゆゑ乳ゆの方此ものを
ゆのうん六病の内社かくし給ふ黄泉の所一往不定
去堂何方再會無期絶書欲方存設隔路号飛
鳥不通情衣欲寄生死堰矣号意馬徒疲と云りかい
らぬ海を今一度乙ひる事やとく山ぬ紀母おこの髮
をりいきくゆりいもゆ芸今ゆひのひおくとて七の方自ゆ

を切ひて雲林院菩提講と申古事ゆて忍き戒
なりりりひり又其寺のことに形ち如く法ゆ乃せん
ゆとくいとおゆきかの菩提を弔ひ上へりく君ゆの
比水を要ひりる四ゆ姫君ハ樓ゆつゆひ免君乃を
とりりゆ四ゆ乙の君ゆ花を上ゆ打ゆとて父の後生をゆ
らいゆりゆ長也時移事去樂えく世事ゆ天人の
ゆすいと長乙へくゆ乳ゆ大納言の内妹小木内府の
少の方ゆ折ゆ流ゆさるゆくの送ゆ物ゆ乙ゆ是を乙ゆ
人ゆ乙ゆおゆ思ゆうゆ内大臣の走ゆの

きて居たる所へ大納言殿宮殿に有れば都へ
上られ給へきはへ今より数日殺生を禁じ給へと
思召しなりしかども又酒にくを入るを
もつたいなきやうに沖に漕出して海に入るとなさ
たる但ひとたび死なんたる事とまつと
おぼし給事は彼智明のさい頃のむくめ三人五七月
十旬の比一度に高熱を患ひ行の林も中は
くり入て行のわたひにつかれて三人なから一度に死りり
是別大納言殿に礼れと芳へと思ひ給ふ恐り

り事共なきて大納言かく礼給ひし九日と中りたる
中の刻ばかりに天の色曇り雨降り雷鳴大洪水三川る程也雷電をひたすらに写蔵之地の
禁に参りかく恒遠に礼をかくかくと我命
絶り時長くして菩提寺にはかたけをかせ
り汚おくに安穏に者にとてありそりおく
ケ度に人とたるの次郎はの事を聞て大ふ
おそれいて文武二道の男なりは礼装を着し
足ほうのさきを正くして御弔を拝奉て

天下向く我誤おしく主君の命ふるゝを重ふ敬
而たゝ大納言は其所とも思はるゝ上りまた
々り則位いの高しる恵をとゝ梨〜文浮土と号に
人ゆるゝ比乃大納言先祖に起こし位正二位を極
め剣大将ふ内ゆを受る事とかゝ人ふよて皮
目をとめ之ゝ礼ハ此人の京に宿恵ふ上ふ常ふ黒
雲をほゝ重有り龍に住恵ふて出てかゝる事
をの礼ふと〜性ふ〜ふゆゝふ死して後如形すれ
相現〜れる迄〜恐〜かゝと〜事共也

## 讃岐院御事

新院讃州配流に後ゝさぬ紀の院と中ゝを廿九日
追号有く崇徳院と中去保元ゝ年七月ふ崇國ふう
以ゝ礼ゝ初ハ真島ふ中〜〜弟ゝ後ゝさぬ紀の國
に一ゝ在廉野大夫ゝ家ゝ堂に渡ゝ申ひゝ後ハ
つゝ之の家ふ出所ゝ住て渡ゝ申ひゝさぬ紀の院の
主上ゝて日ゝ経ひゝ時ふ河の侍従隆憲と中
ゝゝ院のくゝ申ひゝ礼ハ弟の帝ゝ仕へん事ゝ物
くゝとすとゝを切ゝ今ハ蓮如上人と申ゝ

山林に交りを一向きらいの道に入る為に稚院の山跡を
尋ねて豫州へ参り立島と云ふ所に住居
高くして そこつを為てこそ内へ座一宇を建て
門に武士を置く外に涙をはらはら供はまいりまし
外を見ると門を閉て家事かしかつて孔子蓮如参り
たり孔共兄弟と入事より世を我ら道世の身と仰の
ふ今かつ入れ一目見まいらせんと云ふやまけて
内許を乞んと云ふの武士たちはくはつて孔共はるを
礼を力と及ばせ)めに俗ともなり時笛を西向く吹
名間笑の内に笛を入て待たりとて取出して参
なりとたるを考せ参らんとて一所の川い垣を後参
笛を吹とせまハりを是を聞きて是に笛吹者
ハ是なりはしいかの者の吹屋を見に侍従隆
憲ふ元しく宗の者に成かハ成物のかと
く免して今更感しくおもて物思ひ出
御坊の心聞に公論世話を為乃ち
今世の思出後生の祈に今一度おろ参らんとおく
ろく中名院是を聞免して出の御後参まの人す

蓮如おかく〳〵このくはてゆゝしき
身を捨て木の根岩ふかき所に入かゝる者ふたゝび
院号を聞たゝまし引ハ此世と思ハれ人ゝ悔りあ
ハ御ゝを上くゝ勢ひ強く久しく有く仏の共法門を
と出さんとおもはせんとや思ひ給ふ人一筆を書て
ちゝ之川ゝ引ハ（おけ出〳〵ハ如来）ぬ見を強く
月の見ハ之引ハ
あさ〳〵や多く徒よ因まふ法王ゝ海士のたゝかの乃ゝ
蓮如柴一筆を世ゝ引ハ此ゝ都ゝ之ゝ事ゝこの

紀ゝ〳〵仏の御ゝ之おく仏の根ゝ悔やせを思ひて
いゝんゝかくたゝ之ゝ多ゝ兎六月の花ゝ世ゝ思ハ〳〵た
者の多ゝ斗ハ聞ハ引ハ引と日ハ之ゝ事ゝ引ハ
無ゝくゝ多ゝくの国ゝを巡ゝ治ゝ所ゝ引ハ
〳〵ハ多ゝ法を巡ゝて之ゝ入ハ此事ゝ我ゝ悔
くハ〳〵但ハ引ハ引ハ今世ハ引ハ紀ゝ世と思ハ此度
生死を捨ゝ引ハ之ゝ極ゝ浄土ゝ参ゝ也ゝ（昔）如ゝこの
身に成ハ引ハ多ゝ極ゝ浄土の意〳〵ゝ引ハ紀世をいとひ
ハ也者ゝ引ハ引ハ引ハ者ゝ引ハ小都ゝ引ハ多ゝ引ハ

つゐせ[世]ぞ[ぞ]へ[へ]たい急き浄土（きやうど）と思ひ
ながら〜と蓮如のかるまま来世ゝて衆生（しゅじょう）
とて笑ふかゝ者く島をかく〜花出ぬ世間如
なる事感ずゝ思ひ〜ながれ之人生の事を思ひ〜ながら
後生菩提ゝ為ゝ如来の大せ〜願を仏業ゝ三ヶの間
書集めゝ世ゝ宝（ほう）（十ゝ世ゝ）ひなる八宗付ゝ仏教の
大系綱を三年の間書集くゝをゝいゝゝの多りせ
必書を四八枕置事ゝ事〜〜て〜〜ゝ有（ゝ此綱）
斗都を記し八幡宮ゝ置事ゝ〜ゝ中略ゝ記ゝ書乃

なゝ
浜手書ゝ記ゝ新ゝ西（より）身ゝ雪山ゝ書ゝ乃ゝ
出家ゝ此ゝ〜関西ゝ（へ）ま出ゝ給ゝ自関西ゝ内裏
（へ）ゝ出ゝ新ゝ花ゝ細ゝ言ゝ入ゝ信西ゝ中ゝ者ゝ
うてゝさゝ事ゝ（へ）ま上（ゝ）嚴（ゝ）ゝ乃ゝ上ゝ（ゝ）と大ゝ孫
ゝ者ゝ花ゝ八綱ゝ新（へ）入ま〜ま者事叶ふ（へ）ゝと作
ゝ出ゝ花ゝ多ゝ新院此事聞〜ゝて心ゝ（ゝ）ゝ者ゝ
ゝ乃ゝ新ゝ西ゝ宗ゝ（ゝ）ゝ小ゝ（ゝ）ゝ或兄弟ゝ仏ゝ論ゝ或
おちおい國を年ゝ合戦をいたす事ゝ常のおゝひゝ

礼拝くハかうのまゝ おとりまつり足りまけおちま
らされとも 法を今こゝ隆人小弟孔重之と加工行
之事ゝやある 永今悪行のあらをりてかゝる苦
を受れハ今世の事を捨て後世菩提の為工經を写
寺を建石塔を造ゆるされす此世計りの歎の
ハかゝる子後生をの歎はさんかれと大悪ハ後を立
之拝ゝ苦の礼を市吾の之を喰ひ勢あひ之その
無をりて御經の世ものとまた誓云を拝ゝ
なる我此部の大乗經を三悪ハかけこゝろ此大善

根の力をりて日本國を減ぶる大厄縁とかゝんとち
ゝ之勢あひ之其度に出れ形ハ世ハ生かゝる天
物の形小ゝ勢あひ之れ亥と中長寛二年秋八月
廿六日ゝ四十二りて志度といふ處ゝ海小かゝ礼
ゝ勢あひ五骨をかゝる高野山へ拝ゝ礼と
さいしに位置もなくとかゝ拝礼ゝ之ゝ此ゝ学
弟ゝ去ル仁安三年七月の比佐藤兵衛入道西行
法ハ大法房圓位と拝改名ゝる國行ゝ名ハ
讃岐の木山と云處ゝ是ハ新院の渡ゝ勢あひ之處

のしと思出すに乗り高り名礼芸其跡を二へ底杉の葉
ゆ雪降のをつて名を埋く人の通ひなき路りかしを
島より志賀と云所に移らせ給ひしを又しくなり給れ
ども如と云所にはさすがに雪ちるこゝハ
人の通ふ所きうもしを所と云所の山墓石
ゆ尋来りたりなふこの中に國人の墓の柱にて草葉
かくれ志常りたりいるゆりなりなる山之色く業にて見せ
申ふ所にすると出給ふく見えく前に十せんの手とそれ
重の内ふまりと礼之明く意くるひしくに今ハ三

途に屋ゆふまりひ之八宝寺にて
名と称ふくのまりと申しく
ゆ三千の手と作の礼龍樓鳳閣の中
かくりゆ礼給弁世ふうまひすいと朝ふるひ
くに徒ゆ名をゆ止ゆ名礼宮ゆ屋ゆそ
志なに世乃中とそ
ひいつけと清くと西墓ゆにゆつゆ法花三ゆひ
すに堂ゆ禅信りゆくゆ念佛三ゆん勤ゆ僧一人ゆふ
かりゆ礼と

おなを島の波かけるれる沙和の小浦の玉ぞ
と讀り書れ八墓所考へ〜て俗に黒雲うす
きを〜詠ぬ小歌に紅かすの出潮ふるるを
沙和ぬ玉ぞと上みたり書を出とぬ有るの
〜讀ぬるかをとそひのちを乃け袖うきつく
沙ひく
上古君前の玉の床とてかゝる所に伊かうを七も
と上なり乳と八墓ものとくをつまから時ぬ
乃〜に怨霊すれ心ぬまりるをうと長く見し
叔母の枕とて庵を母に伊ひて七日七夜ぬ念仏
〜て出かたいをうゝひ祈〜て死ぬ者の庵の
前ぬ雲かゝと書付ぬ
久かぬと我後の世をとゝよ去ぬ思ふ人のお死身を
宇治左大臣贈官の事
八月三日宇治の左大臣贈位の事有へしと之勅使
か納言ぬと加の墓に死宣命を持て大政
大臣正一位を贈らるゝ為ぬ詠ける件乃
八墓と大和の國添上郡の上九村般若野の又三ぬ

世すゑ〳〵保元の秋の初に堀起〳〵て捨られし後は
死骸を野辺の土とかしこ〳〵に春の草の露に
今勅使尋て来て宣命をいひへ亡魂いかに見
しらん哭来り〳〵思の外に世の乱れ唯
事出来て偏に怨霊のいたす業也と人々ひやさ
れもしらぬ夢に入りぬる
さてきし院鳳輦の内こゝにかゝる左府又腰輿
に乗して先陳に出せ給へ平右馬の頭忠正後陳に
六條判官為義子息ともに引具して都合其
勢三百余騎にて白籠赤けゝ笠具して内裏
前後に打ひ給ふ忠政鳥羽の南門にて馬をひき
て見給ふ川方へ出こゝにて仕へくゝ給ふ
左府の作院御所法住寺殿と作る礼に礼を尽
中き中に乗給ふ礼に少時御ふ形ひ〳〵く
のく日吉山王の社宿直堂くゝに叶給ふ故せ
給ひ中に礼に作給ふ大政入道の西八條と作る礼に
業ひ〳〵にて三百余騎の兵共同時に鬨をつくり
さきをゝ急門に廿あまり廿人ばかりなる中に引

小や稲荷へ入り相國倒れ伏し法皇をた
しなめやまもする物ゝ多く事也ゆゑ
行教をつくしなるお祈祷しるしなく及はさりけり
冷泉院の御物ゝ多くしくまくく花山法皇の位
をさり給三条院の御門ゝかりしに元方民部卿
此御門の御をとゝ兼也抑三条院の御門
世を見せ給ひしに社司の神ゝ御眼いとゝよ
らかいさうかなる事淡らせあはせ給ひ
宣事の様ゝ御ゝ世斉宮の御ら也

多くおけ世給ひしを御まゝ也之ゝ御ゝ
ら世あひ事ゝ是を人見奉也之ゝ御ゝ引出そとハ中
ゝ孔雀ゝ今ゝ御ゝ祈ゝ祈ゝ祈ゝ祈ゝ事ゝ孔ハ
早良の廢太子を崇徳天皇と号し井上内親
王ハ皇后ゝ職位ゝ補ゝ怨霊ゝ
御ゝ同十二月廿四日彗星出又
いろゝ事ゝ御ゝ
御ゝ彗星ゝ五行ゝ気ゝ星ゝ変内有
大兵外大乱といへり

平家物語巻四終